

# 詩的考察：

## 生き残るための妄想共有の試み

高野吾朗

育てる

眠っている私の元へ あの死者がまたもや訪ねてきた  
もう戻ってこなくてもよかったのに

そして まず手始めに 私が見ている夢の世界の中へ  
私の許可なく強引に 右手をまた突っ込んでくる

夢の中で私は 生きていた頃の死者の誕生日を祝して  
どこかの店で 香水を選んでいるのだった

世界各地からの様々な香水が 様々な基準に合わせて  
並べられている 例えば

贈られる相手の 被害の大小 加害の強弱 普遍性の  
程度 あるいは 偏狭性の有無

それらに合わせ 贈るべき香水も異なってくるらしい  
私が悩んでいると 死者の右手が

再び私の許可なく 香水を一つ選び 私に押し付ける  
それと同時に 死者の左手が

眠る私の衣服を静かに脱がす 仰向けの裸体をしばし  
死者は眺める 今夜の工程を再確認中なのだろう

死者が背負ってきた大きな袋は いま私の枕元にある  
中身はいつもの通り 私自身の過去の言葉の山だ

左手はまず 私の素肌に盛り付けるだけの分の言葉を  
袋から取り出す 前回と全く同じ慎重さだ

一方 夢の中の私が 生きていた頃の死者に先ほどの  
香水を渡して 生涯の愛を誓うと 場面は暗転し

私は いつの間にか親となっており わが子のために  
食事を作ると 皿の上に丹念に盛り付けはじめる

「こんなまずいもの 誰が食べる」と わが子が声を  
荒げた瞬間 「もう見捨てたい」という心の声が響く

死者の左手が最初に選んだ言葉は 「醜い心を正直に  
吐ける場がどこかにないと 殺人は減らない」

忍び笑いをしつつ それを私の腹の上に盛り付けると

死者の顔つきが 悦楽の色を帯びはじめる

「死を恐れぬ獣の心へと戻る瞬間を 全く持たぬまま  
死んでいく人間は 全く不幸だ」

この言葉で 私の裸の胸を妖しく飾り付けていく左手  
一方 右手は次々に 私の夢を好き勝手に変えていく

次の夢のわが子は某外国の一市民であり 独裁政権の  
誕生により 命を狙われる立場にある 国外へ

逃れるべく 最後の国際便に乗ろうと空港へ向かうが  
同じく国外逃亡を希望する市民たちの大群に

進路を阻まれ やっと機体に達したのは 離陸の時だ  
その翼にわが子は懸命にしがみつくと 見上げると

コックピットから 操縦士が見下ろしている なんと  
私だ 「外国人」の私も 独裁政権下では 弾圧の

対象なのだ このまま離陸すれば 子はいずれ翼から  
落ちて即死だ 「子供など持たねばよかった」

私が頭を抱えた時 死者の左手が 次なる言葉たちで  
私の股間から足先までを 豪華に飾り付けていく

「助けを求める全ての人々の声がちゃんと届く社会を  
私たちの手で 育てていかねばならない」

「生命を助けるべく 科学は生命を変質させてきたが  
その歴史の背後には 多くの失敗と死があるのだ」

醜い容姿の奴隷を 無理やり着飾らせ 美と高貴さを  
人工的に育て上げようとする支配者のごとき表情で

死者が私を見下ろす 感謝しろとでも言わんばかりだ  
死者の右手が またも私の夢の中身をもてあそぶ

すっかり成長して中年となったわが子が 農民として  
自分の田畑をぼんやり眺めている それが次の夢だ

懸命に育てた農産物が 大雨による浸水で再び全滅し  
絶望の中 「育てるとは何か」と自問するわが子

その後ろに立っているのは 老いさらばえたこの私だ  
「これ以上 おまえに迷惑をかけたくはない」

何度もそう訴え 私はわが子に 彼方にそびえるあの  
聖なる山まで 私をおぶって連れていけとせがむ

そして 山の頂上で ぼいと捨ててくれとせがむのだ  
「育てるとは何なのか」と再び自問するわが子

袋の中の言葉を 全て私の体に盛り付け終わった瞬間  
性行為を終えた直後のごとく 死者がぶるっと震える

と同時に 私の夢から右手が姿を消し 私は覚醒へと  
導かれはじめる そこに自慢げに登場するのは

いつもの通訳だ 「こんばんは 今夜の仕事はこれで  
終了とします この死者の言葉を理解できぬ 愚かな

あなたのために今回も通訳いたしました この死者を  
死へ追いやり この死者よりも長く生きてしまった

恥さらしのあなただけのためにです」 「未開人」の  
立場に強制的に転落させられた知識人のごとき

嘆きと怒りの思いが 私の覚醒を加速する 通訳者の  
言葉は止まる気配がない 「あなたたち生者は

死者という民族が必ずどこかに存在すると思わないと  
不安で仕方がないらしい この死者の今の住処にも

軍隊や学校や国語 おまけに国造りの神話や 戦争の  
長い歴史までもがそろっていると いまだ身勝手に

信じ込んでおられるのでしょうかねえ」 覚醒し終えた

私の右手と左手が 通訳者の首を絞めはじめると

私の裸体から言葉たちがぼろぼろと転がり落ちていく

食べ残された末に無惨にも廃棄されていく料理を

見るかのように その光景を 哀しげに見つめながら

今夜の遊戯を終えた死者は それでも満足そうに

またどこかへと去っていく 残されるのは前回と同様

私 通訳者の死体 香水のほのかな香り そして

私にすがりつくかのような姿勢のままに すやすやと

なおも眠り続ける この子だけだ

## 退屈な二人

あなたと私の間には もはや会話は生まれないのか  
深く重い沈黙が ただ延々と続いているばかりだ  
沈黙以外にあと一つ 冷め切った二人が いまだに  
共有しあっているのは 言い表せぬほどの退屈さだ  
あまりにも長く 一緒に暮らし過ぎたせいだろうか  
理由は本当にそれだけか そう私が自問するたびに

二人の間に置かれた電話が今日もまた鳴る どうせ  
「あいつ」からだ もううんざりだ あなたも私も  
電話に出ようとしない 呼び出し音だけが 何度も  
繰り返される中 私はふと考える 電話でただ一度  
聴いただけの「あいつ」のあの声と あなたがただ  
一度 電話で聴いただけの「あいつ」の声とやらは

本当に同一人物なのだろうか 私たちは 二人とも  
「あいつ」に会ったことがない そして あなたが  
「あいつ」と電話で話してから数年後 私に対して  
自分の経験談を話し始めたあの時こそが 現時点で  
二人が言葉を交わした最後の機会となっているのだ  
「おまえの大事なあの人が もうすぐ死にそうだ」

あなたは「あいつ」から 電話でそう言われたのだ  
「臨終の瞬間に間に合いたいのなら 今すぐ来い」

大事な人とは誰か　なぜ自分が行く必要があるのか  
そして　どこへどのように向かえばよいのか　何も  
わからぬまま　あなたは私に黙って　家を出たのだ  
自らの属する全ての組織にも　全く何も告げぬまま

衝動に身を任せ　数日間　休みなく路地を歩き回り  
たどりついたのは　コンビニと郵便局とデパートが  
立ち並ぶ　そのすぐ裏手に広がる大砂漠で　そこに  
点在している数々の　大理石の神殿遺跡の中心には  
みずぼらしい姿のピラミッド形の建物が　一つあり  
その中に入るためのドアらしきものも　複数見えた

列柱の間を吹き抜ける風が　あなたを叱咤し続けた  
「靈魂よ　来るのが遅いぞ　責任感がなさすぎる」  
この中で　あの人は　孤独に死と直面しているのか  
そう思い悲しがる自らの心が不可解なまま　ドアに  
近寄ると　「あいつ」のような声で風がまた怒鳴る  
「開くドアはただ一つだ　チャンスも一度だけだ」

間違ったドアを選んだらどうなるのか　風が即座に  
答えた　「そうなると　おまえこそがあの人の命を  
奪ったと　歴史に記録されることになるのだ　いや  
おまえだけではない　おまえの属する全ての組織が  
おまえを使ってあの人を殺害したと記録されるのだ  
どのドアが正解か　あの人は今　死の床から正解を



囁いてくれているから 壁に耳を当ててよく聴け」  
言う通りにしてみたものの あなたの耳に届くのは  
「ココデ生マレ育ッタノニ ナゼダ」という言葉と  
「書類ガナイダケナノニ ナゼ追放ナノダ」という  
言葉の幽かな繰り返しばかりで 肝心のドアの話は  
皆無だった それでも夢中で耳をそばだてていると

風が大きく溜息をついた 「おまえより先にここへ  
呼んだ連中も おまえと同じく 聴く力に難があり  
結局 どのドアも開けぬまま 他の神殿群の盗掘に  
夢中になり始めるか 罪悪感に押しつぶされながら  
遺跡群を放浪し始めるかのどちらかだった そして  
どいつもこいつも 地平線の果てに消えていった」

風の辛辣さに反して あなたはピラミッドの内部に  
さらに魅かれていった 「自己犠牲」という言葉が  
生まれて初めて 脳内を占めた 自分の体が若さを  
失いつつあることに 生まれて初めて喜びを感じた  
「嘲笑する風の声を背に感じつつ ずっと壁に耳を  
当て続けたのだ 声にならぬ声を聴き続けたのだ」

その台詞を最後に押し黙ったあなたの顔は まるで  
重力の痛みから一瞬だけ解放されて 無重力の中で  
眠りを貪ろうとしているかのようにだった それ以来  
今に至るまで あなたは私に対して 沈黙のままだ  
あなたのこの奇妙な話を聴きながら あの日 私は

電話の隣に今なお置かれているコウノトリの剥製を

じっと見ていたのだ　そしてあなたが　懸命に壁に  
耳を当て　聴き取ろうとしたその声の主は　もしや  
首から下だけが人間で　首から上はこの鳥の顔では  
なかったろうかと　勝手に妄想したりしていたのだ  
それにくわえて　自分自身と「あいつ」との電話の  
やりとりを　ぼんやり思い出したりもしていたのだ

「おまえの余命は残り僅かだ　このまま死ぬ気か」  
あの日　私は「あいつ」から急にそう言われたのだ  
「もっと長く生きたいのなら　今すぐここに来い」  
見知らぬ者から突然　こんな物騒なことを言われて  
どうして私は　疑うことなく鵜呑みにしたのだろう  
どこへどう向かえばよいのか　全くわからないまま

私は衝動に身を任せ　あなたに何の相談もせぬまま  
家を出たのだ　数日間　休みなく数々の路地を歩き  
たどりついたのは　コンビニと郵便局とデパートの  
裏手にずらりと立ち並ぶ　誰かのための収容施設で  
入口のアーチ型の門には　高々と　「幻を持たない  
生命は必ず滅ぶ」というスローガンが掲げてあった

門をくぐった途端　私はすぐさま両腕をつかまれて  
建物の一つに無理やり連れ込まれた　広い室内には  
一羽の大きな白い鳥が　黒い嘴と　黒い羽根の先を

まるで見せびらかすかのように 毅然と立っていた  
がらんとした空間に存在しているのは鳥だけだった  
その空気を切り裂くように「あいつ」の声が響いた

「この絶滅危惧種は この世にもはやこいつだけだ  
おまえの寿命を延ばしたければ この鳥を今ここで  
おまえ自身の手で殺すのだ ただし この鳥が全く  
苦しむことなく 全く痛がることなく 一滴の血も  
流さぬ方法で 来世へ解き放してやらねばならぬ」  
そこから私と鳥との 喜劇のごとき格闘が始まった

暴れる鳥の体をようやく両腕でしっかり抱え込んだ  
その瞬間 「あいつ」の声が再び室内に響き渡った  
「さあ 今こそおまえ自身のことを 市民の良心を  
押しつぶす国家権力のごとく あるいは 神以外の  
ものを疑いもなく神と呼び続ける無知の徒のごとく  
あるいは 汝の敵をもはや愛さぬキリストのごとく

想像するのだ」 その言葉に心が従った途端 鳥は  
無痛のまま 血を流すことなく 腕の中で絶命した  
「その死体を剥製にしてやるから 家に持ち帰って  
どこかに飾れ それでおまえはまだ死なずに済むぞ  
これほど神聖な物々交換が可能なのはここだけだ」  
この鳥と何が交換されたのか またも不可解なまま

剥製を抱えて外に出て 施設の門を再びくぐろうと

していると 後ろで複数の甲高い鳴き声があるので  
振り返ると 剝製の仲間たちが数十羽 毅然とした  
姿で 私をじっとにらんでいた そして どの鳥も  
首から下だけが鳥のままであり 首から上は 全て  
誕生から今に至るまでの様々な私の過去の顔だった

時間という概念が全くない場所から やっと戻って  
きたような顔で 私とあなたは互いを見つめている  
なんという退屈 今ここで 空爆や宇宙人の来襲が  
起きたら 少しは楽しくなるだろうか もうすでに  
私たち二人は死んでいるのかもしれぬ すると再び  
電話が鳴る 受話器をあげると案の定「あいつ」だ

「目の前にいる人間をおまえが

まだ愛しているのなら または

おまえの中に潜んでいる狂気を

早く鎮めたいのなら 目の前の

人間のしづさを 今から直ちに

全て真似するのだ さあ早く」

これから始まる 私たち二人の

無言の物まね遊びは いったい

いつまで続いていくのだろうか

そんな喜劇をぼんやり見つめる

コウノトリの嘴が 久しぶりに

開き 無音のまま 深呼吸する

「ああ」

わたしを喪ったあの日以来 あなたが弾くピアノからは  
ばらばらに砕け散ったわたしの魂のかけらの一つ一つが  
全て音符と化して 地下へと次々に放出され続けている

あなたの庭から逃げ出して 自由気ままに放浪した末に  
車にひかれ死んだ飼い犬 それが本当に生前のわたし？  
哀しむあなたを包もうと 音符たちは密かに計略を練る

一斉に落下傘を背負うと 音符たちは引力に逆らいつつ  
地下から地上へ次々に上昇する 落下傘が花開くごとに  
ピアノの音は膨らみを増し あなたの耳は温もりを増す

あともう少しであなたの心が落下傘で満たされる その  
時になって初めて 主旋律の鍵を握る音符がひとつだけ  
未着であることが判明する 小枝にでも引っかかったか

あなたは「ああ」と言いながら鍵盤を離れ 読みかけの  
本の余白に目をやる そこには誰かの筆跡で「不安定の  
詩学も滅びの美学も もはや資本主義の手先だ」とある

そしてあなたは思い出すのだ 友人たちや親族たちから  
「あの曲はもう弾くな 弾いているのが公に知られたら  
不敬罪で拘禁されるぞ」と何度も警告されてきたことを

\*

読みかけの本の主人公たるわたしを 喪ったあの日以来  
油絵を描くあなたのパレットには 砕け散ったわたしの  
魂のかけらたちが それぞれ乾いた色の塊と化している

自らの排泄物を飢えた者たちへ食料として与え それが  
露見し殺された人物 それが本当に生前のわたしの姿？  
あなたの肺を満たしたくて 色たちは密かに計略を練る

一斉に潤いを取り戻すと 色たちは引力に逆らいながら  
自らの匂いの爆弾をあなたの鼻腔へ押し上げようとする  
爆弾が破裂するごとに あなたの呼吸器は万華鏡と化す

偶然が織りなす色彩の匂いの連なりが あともう少しで  
わたしの生前の容貌を再現しそうなところまで やっと  
来たというのに 最も強力な爆弾がなぜか不発弾なのだ

あなたは「ああ」と一声もらずと 描きかけの絵を離れ  
ふと考え込む 「空虚をテーマに ずっと作品を描いて  
きたはずが なぜ今 戦争協力の絵を描いたりする？」

「この方のお顔をこんな風に描くのは不謹慎だ」という  
批判や 「この大悪人を描くとは おまえも仲間か」と  
いう非難を受けた日のことを あなたは同時に思い出す

\*

この人物画の中で描かれかけているわたしを あなたが  
喪ったあの日以来 あなたの言葉の端々に 中途半端に  
刺さり続ける針 あれも皆 昔はわが魂のかけらだった

周りの者たちが 「早く死んでほしい」とずっと密かに  
願った存在 本当にそれが生前のわたしの姿だったか？  
あなたの視覚を真に覚醒させるべく 針たちは策を練る

零れ落ちるあなたの言葉から 一斉に自らを引き抜くと  
針たちは引力に逆らいながら 束となってあなたの眼を  
下から狙う 刺さる 刺さる 次々に針が 眼球を貫く

あなたが思わず漏らすその「ああ」の直後に続く言葉は  
「生きねばならない」なのか それとも「もはや自分の  
体が信用できない」なのか わたしには想像がつかない

いま思えば 音符も色も針も まるでなにかの新商品に  
つけられた宣伝文句のようで 所詮は全て同じ事だった  
それでもなお 宣伝文句は今後も作られ続けていくのだ

作るのをやめたら それこそがあなたへの最大の暴力だ



## 鐘

どこにも行き場のない体になってしまったので  
この場で不動のまま 独りダンスを始めてみた

私の体を長らく労わり続けてくれた あなたの  
姿が 次第に見えなくなっていくのは なぜだ

つけっぱなしのテレビのニュースが 通り魔の  
殺人事件の犯人の顔をクローズアップしている

「人生は『善か悪か』ではなく『悪か最悪か』  
だ」 姿が消える瞬間 あなたが遺した言葉だ

思いつく限りのステップを踏むうちに 過去を  
全て捨てたくなり どこかで読んだことのある

とある民族の通過儀礼を真似てみることにした  
今まで付き合った全ての恋人の名を 紙に書き

それを真夜中 群衆の前で炎に投じてしまえば  
全ての過去が消え去るどころか 全ての言葉の

意味が変わってしまうのだ そうだ 踊りながら  
人生唯一の恋人だったあなたの名前を 震える

手で紙に書き　いまや私しかいないこの部屋を  
見知らぬ者たちだらけと妄想しつつ　紙に火を

つけてみると　真夜中の「部屋」が「砂漠」に  
「炎」が「道」に　そして「私」が「鐘」へと

変わった　見えない何かに吊られたままの私は  
砂漠の表面から少し離れ　かすかに揺れながら

炎天下　蜃気楼を縫うように　か細いこの道を  
こちらへと進んでくる　一台の馬車を見ている

私の金属の肌が無色透明なのは　祖先の色素の  
遺伝だろう　祖先は一体どこに住んでいたのか

聞こえないはずの馬車の中の会話が　私の耳に  
届く　この「耳」も　あの紙を燃やす前までは

「目」と呼ばれ　この「顔」は「心」と呼ばれ  
この「肉体」は「死」などと呼ばれていたのだ

詩についての議論がまず聞こえてくる　詩とは  
気軽に口ずさめてこそ存在価値があるのでは？

読者の心を温めてこそ存在価値があるのでは？

滑稽さを排し 芸術性をとことん追求してこそ

本当の詩なのでは？議論に夢中の乗客たちには  
宙に浮かぶ私の姿が まだ目に入らないらしい

かくも健康で正常な私は かつてなかったのに  
誰もこちらを見てくれぬまま 乗客らの議論は

「地動説は本当に真理か？」だの 「寛容さは  
本当に必要か？」だのと 次々に脱線していき

最後は 「観念の中にだけ存在し 実体が全く  
ない愛ほど恐ろしいものはない」という考えに

全員の意見がやっと一致したところで終わった  
馬車が止まる ぞろぞろ降りてきた旅人たちが

一斉にこちらへ歩いてくる 手にしているのは  
いったい何だ そのうちの一人が 私の表面の

全てを使って絵を描いた 本物と間違ふほどの  
鐘の絵だ すると別の一人が 手にした何かで

その絵を壊しはじめた 描いた者も 壊す者も  
等しくどこかで見た顔だ あの通り魔の顔か？

そう言えば あなたが遺した言葉には 続きがあった 「変形し損ねた苦しみは 伝染する」

残りの旅人たちは 私を通り過ぎると 砂漠を ずんずん横断していった その先には 虹色の

巨大な鐘が 私のように宙に浮いていた 一体 どんな祖先を有する鐘なのだろうか 静物画に

心を奪われたかのごとく無言のままの 旅人の 一人が 厳かな手つきで虹の鐘を鳴らす その

音響は 砂嵐の只中にこだまする遠雷のごとく あまりに呪術めいていて 意味づけがしづらい

その鐘があなたかもしれぬと思うまでに 私は 一体 どれほどの時間を必要としたことだろう

旅人全員が 虹の鐘の真下に集合したところで 鐘は静かに落下し 砂漠はまたも無人となった

宙に浮く透明な鐘と 砂上の虹の鐘は まるで 観念の世界の中で 互いの自死を助け合うかの

ように あるいは まるで 長き分断の果てに 互いを求め合う二つのブラックホールのように

見つめ合う ああ ダンスの靴音に似た残響の  
中を また馬車だ 次なる一団は 鐘の金額を

相談中の商人たちだ それにしても 「金」は  
あの紙を焼く以前 何と呼ばれていたのだろう

## レジスタンス

私は眠るロボット

眠ることだけを目的に作られた ロボット

眠って起きてまた眠る ただその繰り返し

私を作った技術者は その昔

この国の起こした戦争に 賛成なのか 反対なのか

最後の最後まで どちらの側にもちゃんとつかぬまま

戦争の終わる日まで ずっと黙ったままだったようだ

全身が完成したその日から 私は毎日 様々なお客様の

ご自宅へと たった独りきりで派遣された

「指名して下さったどのお客様にも 常に柔軟に対応し

どんなことをされても たとえどこかが壊れたとしても

いっさい反抗せず しっかりと耐え 最後の最後まで

深い眠りを休みなく維持して 終了時刻を迎えたら

すっきりと目覚め お金を頂き そして速やかに退室する

おまえはそうように作られた とても善いロボットなのだ

どのお客様も必ず『また逢いたい』と思って下さるはずだ」

最後の別れ際に 技術者はそう言いながら私に手を振った

まるで何かをすでに予兆しているかのような表情だった

ただ眠るだけの私を なぜお客様たちは必要とするのか

ロボットの私なんかにも もちろんわかるはずなどなかった

あなたにこうして 初めて指名された今日までの間に 私は  
様々なお客様に指名され 彼ら彼女らの隣で 仰向けのまま  
じっと身を横たえ するべき仕事を問題なく果たしてきたが  
今日は そんな過去の具体例を いくつかお話ししてみよう  
「君の体には 記憶力など埋め込まれていないはずだ」とか  
「その具体例とやらは 全て君が睡眠中に見た夢だ」などと  
きつとあなたは すかさず否定しようとするのかもしれない

まずは一人目……

滑るように眠りへと堕ちていく私の隣に座り  
ロボットの私には全く縁のない食物を 一度も  
口に入れることなく ずっと手に持ったまま  
私に向かって終始しゃべりっぱなしのお客様がいた

「この食品を わたしが絶対に口にできぬ理由を  
わかってくれる人間は この世に一人もいやしない  
わたしは ほんのちょっと食べ物を咀嚼しただけで  
それを作るのに関わった全ての人たちの心模様を  
一瞬のうちに感じ取ってしまう 特異な人間なのだ  
この食べ物の奥底には 大量食料廃棄の現状を 常に  
憂慮している多くの男女の哀しみの味がたまっている  
彼らは原材料の獣たちをわが子のように愛していたのだ  
彼女たちは 原材料の植物たちがあまりにも育ちすぎて  
人間社会に迷惑をかけるその前に 深く感謝をしながら

それらを丸ごと丁寧に摘み取ったのだ。そして、自らの生活燃料は、残された他の植物たちを燃やして作るのだ。それ以外の燃料には、決して頼ろうとはしないのだ。

私の横で、このお客様はどうやら泣いていたようだ。頭では「死ぬほど食べたい」と強く願っているのに、口に入れると「まずい」としか思えないその食べ物を、ずっと手に持ったままの。このお客様の周りには、薬品のような臭いの漂う、空っぽの食品ケースが、無数に転がっており、たしか、そのうちの一つは、眠る私の胸の上にも置かれていたような覚えがある。

そして二人目……

人間との性行為など、そもそも不可能な私のこの体を、必死でまさぐるお客様がいた。男だったか女だったか、それとも、それ以外の性だったか、もはや曖昧である。「もはやわたしは、眠ろうとするものにしか欲情しないのだ。眠りさえしてくれれば、機械だろうと人間だろうと構わない」。そう言いながら、お客様は、私の顔面部分に唇を寄せてきた。「わたしのよなよぼよぼの人間にも性愛はまだ必要なのだが、その性愛にさえ、意味だけは必ず、ないといけない」。衣服を脱ぎ捨てると、お客様は私に覆いかぶさってきた。「わたしのこれまでの人生に意味のないことなど何一つなかった。だが昨日、わたしの全人生の意味を記録した大切な書類一式が、『国家存続のため』という不可解な理由により、ひとつ残らず、焼かれてしまったのだ。さあ、もっともっと深く眠っておくれ。



終了時刻までわたしの好きにさせておくれ ああ ここからまた  
意味が新たに積み重なるのだ 第二の人生が始まるのだ」

私の横で このお客様はそのまま冷たくなられたようだ  
終了時刻が来て 私が目覚めると まるでお客様が  
私のようなロボットで 私の方が 指名客のようだった

それにしても どうしてあなたはいまだに姿を見せないのか  
どうして私は 独りきりでこの部屋で眠らねばならないのか  
こんな奇妙なお客様は初めてだ そのせいだろうか 突然  
私の眠りのプログラムに 初めて大きな混乱が生じた

どうしよう 全く眠れない これでは仕事にならない  
一体どうすればいいのだろうか 仰向けの状態のまま  
苦悶する私の聴覚回路に 姿なきあなたの声がまたこだまする  
「全人類が 君のような深い眠りに一挙に墮ちればいいのに」

眠れぬ目で 暗い部屋の中を舐めるように観察していくと  
目に入る何もかもが 何かの「徴」のように思えてくる  
電灯もカーテンも 机も椅子も どの本棚のどの書籍も  
まるで 普段の社会的役割をすっかり忘れたかのごとく  
ひたすら好奇の目で 私の人工的身体をじろじろと眺めている  
まるでそれは 地球的規模の一大惨禍を企んでいる者たちが  
犠牲者の模範例を あらかじめ熱心に研究する時のような目だ  
または 貴重な生物の化石を発見した者たちが 石化した命の  
尊さよりも いくらで売れるか そればかり気にする時の目だ

「コノオ客様ニ対シテハ イッサイ 眠ラナクテモヨイ」

私の眠りのプログラムの中で 初めて何かが抵抗している  
私が眠らないことが なぜこのお客様にとって最適なのか  
ロボットの私なんかにも もちろんわかるはずなどないのだが  
今日の私は たとえ全機能が崩壊しても 怖くはないようだ

ヒトの細胞に入り込まないと増殖できない病原体のように  
この暗い部屋の中で 私の知らない私が 増殖を開始する

## 最後に見たもの

愛するあなたの肉体の障害と 全く同じ障害を  
早く持ちたい ただその一心で 私は法を犯し  
これら七色の禁断の錠剤を 入手したのだった

と同時に 愛するあなたの精神の障害と 全く  
同じ障害を早く持ちたい一心で 再び法を犯し  
あなたの愛読書を こっそり盗んでおいたのだ

赤の錠剤を飲んでみると 進化に全く不必要な  
はずの体の機能が 進化に必要なはずの機能を  
犠牲にしながら なぜだか急に 進化し始めた

自分の体に初めてエロスを見出し 戸惑いつつ  
盗んだ本の表紙に 初めて目をやると 題名は  
『野蛮という嘘が われわれの文明を作った』

本当の両親が誰か 知らぬまま育った主人公が  
自らの出自の真実に 最後まで到達できぬまま  
無思想で無節操な生に法悦を見出すという話だ

途中まで読んで本を閉じ 次は青の錠剤を飲む  
すると 「聞き手の欲望に迎合するだけの声は  
もう不要」とばかりに 声帯が萎み始めていく

原子のレベルで さらに機械化していくこの体  
無機質なリズムに導かれ 再びあの本を開くと  
題名は『喜びのリスト：不健全が健全を生む』

虐待されるたびに 花壇に美しい花の種をまき  
長い時間をかけ 七色の花々を育てた主人公が  
感謝を込めて虐待者にその花を送るという話だ

愛国心に導かれ従軍したものの 戦地で四肢と  
声と目を失い そこでやっと全てを悟る兵士の  
孤独に似た思いで 黄と緑の錠剤を飲み込むと

改めて開いた本の題名が またも変わっている  
今度は『世界共和国が最後に見たもの』という  
長編詩だ 主人公の男は とある国の独裁者で

国内外の全ての敵を「患者」と呼ぶ彼の目標は  
「患者」全員の「安楽死」だったが そのくせ  
唯一の心の慰めは なぜか 俳句を詠むことで

敵を一人消すたび 破滅させたその命の過去の  
悲喜劇を 「軽み」を交えながら詠み続けるも  
愛用していた季語の存在意義を次第に疑い始め

それを苦に 最後はなぜか発狂するのだそうだ

本を開くたびごとに　このように中身が丸ごと  
変換されるのも　きっと錠剤の効果だと信じて

今度は橙色と藍色を一息に飲み込むと　生気が  
さらに漲るような　それでいて　さらに死へと  
近づくかのようだ　ようやく　あなたの肉体の

障害と瓜二つになれたかのような　それでいて  
あなたの実体が　いっそう薄くなるかのようだ  
本の著者名を確認しようとするが　視界が霞み

あなたの名に見えたり　私の名に見えたりする  
題名も滲んで見えづらい　まるで自分の病気に  
いまだ名前がないことを不安がる患者の気分だ

本を開くと　「いつまで仮定の話拒み続ける  
つもりか」という一行だけが見え　あとは全て  
空白と化している　慌てて手に取った　錠剤の

堇色が　まさか　最後に見たものになろうとは

## 墜落

満天の星々を見上げながら 賑わう大通りを 独り  
そぞろ歩くあなた 夜空のあまりの美しさに  
ふと立ち止まると 路上にピアノを置いて演奏中の  
音楽家が 「一曲いかが」と声をかけてくる

鍵盤から バッハの「主よ 人の望みの喜びよ」の  
メロディーが流れ始めると 街のざわめきが  
ふと静まり 近くのベンチに向き合って座る二人の  
男の興奮気味の声だけが 演奏の邪魔をする

一方の老いた男が コーヒーカップ片手に「経済は  
もはや成長なんかしなくていい さもないと  
地球から緑が消えちまう」と大声でまくしたてると  
もう一方の老いた男が 煙草片手に 嘲笑う

「おまえの考えは極端すぎて危険だ 経済の成長と  
自然の保全は両立できるさ 人間はそこまで  
馬鹿じゃない」 星空にみとれているあなたにだけ  
聞こえるほどの声で 演奏中の音楽家が呟く

「ここからは ファとシの音だけ抜いて弾きます」  
バッハならではの音調に微妙な変化が生じて  
それとともに あなたの眼は 二つの星座に気づく

向かい合って立つ 二人の人間だ どちらも

何かを片手に持っているかのようだ まるで子供の  
頃に戻った気分で あなたはこの二人の心を  
探るべく それぞれの星座の中でもっとも光り輝く  
星を 魔術師のような眼で 一心に見つめる

南側の人物がまず話す 「もし私が君の妻だったら  
君が死ぬ時に最後の息を吐くのを ひたすら  
残念がるだろう なぜならそれは 君がこの世から  
永久に解脱できないことを意味するからだ」

北側の人物が答える 「もしも私が君の妻だったら  
この腹に君の子を初めて宿した時 その子を  
本当にこの世に 生み出していいものなのかどうか  
夜ごと悩み 自問自答を繰り返すであろう」

向かい合う二つの星座の間の闇を 飛行機の灯りが  
ゆっくり進んでいく 善と悪の間を または  
異なる二つの善の間を あるいは 二つの悪の間を  
すり抜けるかのごときその動きに バッハの

旋律が重なる 南の人物がまた語る 「君の口から  
出た最後の息は 輪廻の途上で野牛の幼児に  
生まれ変わる だが初めて立ちあがった途端 君は  
森を彷徨していた人間の子に 銃で撃たれる

次の輪廻の準備を急ぐ息をよそに 死に際の肉体が  
まさか狙撃者を 突き殺すとは あの一瞬の  
悲劇だけで終わっておけばよかったのだ 『人間に  
勝った』とあの時に高らかに宣言していたら

犠牲は最小限で済んでいたのだ しかし野牛の国の  
者たちは 『敵はあの子供だけではない』と  
信じ 全人類を敵とみなし 泥沼の戦いを選ぶのだ  
自らが妄想した罠に 自ら落ちていくのだ」

北の人物が答える 「君の子を本当に生むためには  
その子を愛したいと思う強い意思が必要だが  
はたして今の私にそれがあるだろうか 仮に 私が  
生まれてくる子供本人だとしたら 母親から

もらった自らの体に満足するだろうか 私が不満を  
のちにぶつけても たじろぐことなく真摯に  
私に応えてくれるような母に 私はなれるだろうか  
『こんな生まれ方は 望んでいなかった』と

その子がのちに私を責めても その子の深い悩みを  
無視したり 愚かしいと安直に決めつけたり  
することのない母親になれる強い自信が 今の私に  
あるのかどうか 問いは永遠に続くだろう」



「地球の気候が狂えば狂うほど 世界のあちこちの  
連中が 緑を失った故郷を捨てて ここにも  
必ず大挙してやってくる」 コーヒーを飲み干した  
老人が真顔で断言すると 煙草の火を消した

もう一方の男がまた嘲笑う 「そんな心配は無用だ  
そんな奴らはきっとさほど多くないだろうし  
たとえやってきたって 暴力で追い返せばいいんだ  
いつまで経っても おまえは頭が悪いなあ」

ベンチで取っ組み合いが始まりかけた瞬間 誰かが  
「墜落だ！」と叫ぶ 見上げるあなたの眼に  
巨大な炎と化していく 先ほどの 飛行機の灯りが  
映る それはまるで 行き先を求め彷徨する

吐息のようでもあり 迷いの末に 産み落とされた  
生命のようでもある ベンチの老人たちさえ  
いまや手を握り合い 墜ちていく機体を眺めている  
全く動じていないのは 音楽家 ただ独りだ

今宵何度目の「主よ 人の望みの喜びよ」だろうか  
ファとシを抜いての演奏かどうかは もはや  
あなたには不明だ 機体が大地に激しく触れる瞬間  
すでにあなたは 別の星に心を奪われている

あれは 一等星 アルデバラン おうし座だ

## 亡命

独りきりで暮らす 老父のことが心配で 久しぶりに  
実家に戻ると 父の姿はどこにもなく ただ 居間の  
床に 一匹の巨大なワニがじっとしているだけだった

動物嫌いのあの父が ペットを飼うなんてありえない  
そう思いながら 「ただいま」と言うと 愛着のある  
皿を誤って割ってしまったような目で ワニが見返す

日光を避けるかのように 居間のカーテンはしっかり  
閉めてある 湿気を帯び始めた暗い床に腹ばいの獣は  
まるで 虫干しを今か今かと待つ古代の陶器のようだ

「弱者」として社会から捨てられたことを恨み その  
生き辛さを解消すべく 力を漲らせるかのごとき尻尾  
手術で殺人機械へと改造された兵士を想起させる顔面

いつまで経ってもびくりともしないので 黒々とした  
背中中の鱗の凹凸を優しくなでてやると 掌から静かに  
伝わってくるのは 戦慄と希望の混ざり合った感触だ

それにしても父はどこにいるのだろう 虚空に向かい  
「父さん」と何度も呼ぶと ワニが大きくあくびした  
同じ過ちを繰り返す愚か者を 今にも襲いそうな歯だ

毎日ちゃんと食べているのだろうか 冷凍庫の生魚を  
解凍して与えてみたが食べない 思わず連想するのは  
言葉狩りに怯え 母語を捨てるに至った 詩人の姿だ

隣の家から テレビのニュースの音声が聞こえてくる  
「数多くの仲間が海のせいで命を落としたが 我々が  
海を憎むことは一生ない 海は母なる水なのだから」

その音声を合図に ワニがようやく歩き始める 床が  
滑りやすいせいで 何とも間抜けな歩みだ 「国民に  
勇気を与えた」と言い終えると 隣家のテレビが黙る

どこに向かって歩けばいいのか 最初は途方に暮れて  
いたようだが どうやらやっと目標が定まったようだ  
居間の隣の寝室の片隅 この家でもっとも暗い場所だ

匍匐前進を続けるワニの口から ざらざらとした舌が  
顔を出し 床のあちこちを懸命に舐める 床に落ちた  
髪の毛を拾い集めているのだ どれも人間の長い髪だ

興奮していくワニの口の中で 髪の毛がもつれ絡まる  
「世界中の人が 朝から一斉に『やーめた』と言って  
怠け者になれたらな」 父は昔 私によくそう言った

スロー再生のブラウン運動のごとく居間を横断する獣

そしてどこかで 迫害を逃れ 大陸を徒歩で横断する  
者 大海を小舟で横断する者 大宇宙を横断する死者

寢室の片隅の写真立ての中では 幼い私と 若き父が  
鱗を擦りつけ合って群れる動物園のワニを眺めながら  
微笑んでいる 後頭部の長髪しか見えない女性は母か

特定の地域でしか使えぬ通貨を大切に貯めこむように  
大きく口を開けて毛玉をごくりと飲み込むと ワニは  
遠方にかすむ写真の中の仲間たちに自らの未来を映す

天涯孤独であるがゆえの 無限の自由 この遅々たる  
歩みこそ この獣の芸だ 思わず拍手を送ると 一瞬  
匍匐前進が止まり 全身の鱗が剝製の言語を捏造する

不在の父を捜しに行く前に まずは 浴槽に水を張り  
その中でこの凹凸の鱗をブラシで擦り洗いしてやろう  
私を仲間と思うだろうか 海に来たかと思うだろうか

## プラスチックだらけ

あまりに長い間 無言のまま生きてきてしまった  
このままだと もはや人間ではなくなってしまう

久しぶりに鏡の前に立つと 鏡の中の人間の口が  
誰の指図も受けることなく 勝手に動きはじめる  
「わたしの立場になったら 君も同じことをする  
平時では優しい人間が いざ戦争になると平気で  
人を殺すことを 君もそろそろ知るべき年齢だ」

この口が私に語ったその内容を あなたのために  
以下に要約するから 後で感想を聞かせてほしい

「わたしの住む空間には 個人所有の物など一切  
存在しない ここに暮らす全員によって 全ては  
無料で共有されている 値段をつけられて市場で  
売買される物など皆無だ 無償で助け合う社会だ  
ただし今はあいにく わたししか暮らしていない

一緒に暮らしていた仲間たちのことを おまえに  
要約してあげるから 後で感想を聞かせてほしい

彼らは各自 ある分野に深く通じていた 例えば  
よく見る者 よく聞く者 よく考える者 そして

よく嗅ぐ者 よく運ぶ者 よく歩く者 それから  
よく作る者がいた 専門家と素人の中間のような  
彼らとは わかり合えないことの方が普通だった

つまり わかり合えぬ者同士が 規則を守りつつ  
互いに矛盾しあったまま 混ざり合っていたのだ

話す時も書く時も いつでも必ず 文章を否定の  
言葉で終わらせるのが 我らの唯一の規則だった  
そうしないと この空間に生起するどんな事象も  
言い表せぬからだ 君には理解できまい 戦争が  
日常でない人間に 真の反戦が困難なのと同じだ

彼らの仕事もわたしの仕事も地味で非効率 時に  
土まみれ 時に遊行の徒 だが常に不可欠だった

そんな彼らの姿がなぜ今ここにいるのか 彼らは  
自らの身体を全て 病んだわたしのために 快く  
差し出してくれたのだ 私の体内で 彼らはいま  
時に養われ 時に虐げられ 元々わたしの一部  
のごとく けれど異物のままの姿で 自律している

わたしが彼らを『食べた』だと？ 身勝手な解釈だ  
何でも食わねば生き残れぬ時代なのは 確かだが

今さら彼らが 自分の身体を取り返そうとしても

そうはさせない この体内こそが いまや彼らの理想郷だ 彼らの期待に応えられぬ時もあるが 絶望感だけは与えないつもりだ 彼らのおかげで わたしはなおも複雑化し かつ純粋化するのだ

開いた口の奥に見えるのは誰かの部屋だ 室内の何から何まで 全てが全く同じ材質のようなので

「君も君の仲間も 実はプラスチック製では？」と素直に感想を述べると 「誤解を招いたのなら誠に遺憾」という政治家のような美声と 「私は騙されていたのだ」という涙声が 口から漏れた 「騙したのは私」と過ちを認める声はいまだない

鏡の中の人間はもはや口だけとなり それ以外の鏡面に映る生命体は全て 動く自由を失っている

「死なないで！」というあなたの感想は 本当に私を愛するがゆえの言葉なのか？信じていいか？

## 無人駅の記念帳

4月31日：

「このノートをお読みのあなた こんにちは 私は今日初めて この無人駅に降り立ちました 上りと下りのどちらのホームも 線路が走っていない側の真下にまで 海が来ている駅は全国でここだけです 私の命はもうすぐ終わると言われています 自分のことを もはや自己決定できない状態らしいのですが それは何かの間違いです 旅だってこの通り まだ可能なのですから それなのに 私の臨終用の手続きは はるか昔に私が書いた『意思表示書』に従って粛々と進み続けています たしかに私はあの書類に 『苦しくなったら殺して』と記しましたが それからの長い年月の中で 私の意思は変化を辿りいまやこのような逃亡の日々です こうして左右の大海原を独り眺めているうちに 旅の思い出を記すノートがこの駅にまだ一冊もないのに気づきました この新品のノートが今後 多くの旅人たちの言葉で賑やかになっていくことを 心から願っています」

6月31日：

「こんなノートがまさか置いてあったとは 今まで気づきませんでした 一人目の方がこの駅の両側を『海』に喩えています 今ここから去ろうとする



私の目にはどう見ても 水平線まで続くゴミの海にしか見えません 実は 私はついに決意したのです 我のような高齢者が この国の権力の席に ずっと居座り続けるのは正しいことではありません 私を強制的に引きずりおろそうとする勇敢な人間たちが皆無である以上 私が自ら出ていくしかありません 私が去ったあと この国の権力の座は 私の意思に従い くじ引きで公平に決まるようになるでしょう 次なる権力者へ向けての最初で最後のメッセージを このノートに記して 私は姿を消したいと思います 私はこれまでずっと 『中立』であることを 最も理想的だと信じて生きてきましたが それは愚かな妄想でしかありませんでした 『中立』は幻想です やっと今 電車が来ました 皆さん さようなら

9月31日：

「ここに初めて来た理由は ここが特別区の唯一の駅だからです わが国の領土内にありながら わが国の法律が全く通用しないこの特別区に 私たちが立ち入ることはいまだ許されてはおらず 唯一この駅の構内だけが 立ち入りを許されている区域です 外に出られぬことを知っ

ていながら この無人駅のホームをわざわざ訪れるわが同胞たちのお目当てはあの広大無辺な遊園地です ここから指をくわえてただ見惚れることしかできないのですが あれほど大規模で複雑怪奇 なおかつ とてつもなく危険な

ジェットコースターは他にありません この壯觀を  
とある詩人は『渦潮の宇宙』と称しました 未来の  
神殿のごときあの空間に感嘆してばかりの私の耳に  
聞き慣れない外国語が急に流れてきました すでに  
この世にない私の祖先たちが 私の背後で 『目を  
覚ませ あれは軍食用だ』と呟き続けていたのです  
理解不能なはずの言葉がなぜわかったか 謎です」

11月31日：

「このホームから見えるパノラマを 宇宙のような  
場所と表現する人が このノートにもおられますが  
どうして『のような』などとお書きなのでしょう  
だってここは実際の宇宙空間そのものなのですから  
火星も土星も木星も 遠くは 冥王星や海王星まで  
こんなにもありありと間近に見えているのですから  
昔からこの駅は 銀河の海の中に浮遊し続けており  
いつもの鈍行列車でここへ降り立つたび 私はあの  
大惨禍のことを あらためて心に刻みなおすのです  
あの茫漠たる流星群と 同じくらいの数の大群衆が  
『すぐ戻ってこれるはず』と自らに言い聞かせつつ  
あの日ここから 列車で次々と逃げていったのです  
ごった返す人ごみの中 まさに このホームの上で  
私は命より大事なあの子の手を放してしまいました  
何度ここへ戻ったところで 取返しはつきませんが  
私はまだ泣いたりしません 泣いたら負けですから  
まずい もうそろそろ 酸素がなくなりそうです」

2月29日：

「これを読んでいるあなたはもうお気づきでしょう  
この駅のあちら側とこちら側は対立しあっています  
あちら側の人たちの考えはこうです 『この星には  
いかなる深刻な危機も もはや存在していないのに  
あいつらはこの星を まるで障害者のようにみなし  
一緒に同情しろと 何度も強要してくる 障害者を  
蔑視さえしている』 一方 こちら側の住人たちは  
『世界がおかしくなった最大の原因は 我ら人間だ  
我々は一刻も早く 滅びなければ』と考えています  
ここで生まれ育ちましたが 私は どちらの側にも  
属さずにきました そして今日 私はついにここを  
去ります 愛する人の住む町へ行きます その人は  
自力で地球を危機から救おうと毎日頑張っています  
でも片思いです あの人は私を ストーカーと呼び  
時には 暴力で追い払おうとさえします 今日こそ  
気に入ってもらいたくて 初めて人魚の変装をして  
みました 二人で人生という海を泳ぎたいのです」

（このノートは書くところかもはやなくなりました  
どなたでもけっこうですので 次の書き手のために  
新しいノートを用意しては頂けませんでしょうか）

## にらめっこ

誰かに気づかれるずっと前から  
その蟬は地に堕ちたままの姿で  
必死に 羽をばたつかせながら  
ゆっくりと 死へ向かっていた

はるか上空を 自在に飛び回り  
様々な場で自由に鳴いた記憶が  
蘇っている最中のごとき その  
眼の真実は 誰にもわからない

仰向けのまま 静まりはじめた  
蟬の姿に初めて気づいた人影が  
その顔をじっと見る さながら  
にらめっこでも挑むかのようだ

「子供なんか欲しくもないのに  
どうしてこんなに 作れ作れと  
言われ続けてしまうのか？」と  
思いながら 影が変顔を始める

「独りだからこそ多くの他人と  
連帯できる そんな私の考えは  
誤りか？」 蟬の顔があまりに

滑稽で思わず笑う 影の負けだ

蟬の最後がもうすぐだと気づき  
蟻たちがだんだん集まってくる  
朝が過ぎた頃 二番目の人影が  
軽蔑顔で蟬の前にしゃがみ込む

「おまえらの鳴き声は大嫌いだ  
人間社会にとって迷惑なだけだ  
私を虐げてきた親たちの世代と  
瓜二つだ」 影が変顔を始める

「ガラス越しに老親と面会した  
私が誰か もうわからぬらしい  
おまえの鳴き声のように延々と  
『誰かを殺したかも!』と喚き

目の前のガラスを私と勘違いし  
私の名で呼んだ 蟬のことさえ  
私だと思うかも」 変顔に疲れ  
寂しげに去る影を見送る蟬の眼

蟬の死体を取り囲む 蟻たちの  
動きがいったん止まる まるで  
解剖実習の直前に 献体された  
命へ頭を下げる医学生のようなだ

はらわたを徐々に食われる蟬の  
眼に夕陽が照る 新たな人影が  
それを同情顔でじっと見つめる  
「君も競い合いに負けたのか」

変顔をする気力さえなさそうな  
その人影が同じ言葉を繰り返す  
「いま鳴いているどの蟬たちも  
君のためになんか鳴いてない」

蟬の両眼を濡らすのは涙なのか  
それとも降り始めた雨粒なのか  
陽が落ち 人も蟻も 蟬の声も  
消えた闇に残るのはこの眼だけ

剝軽そうなその球体に映るのは  
何なのか その何かを 永遠に  
笑わせようと努めるかのごとく  
またにらめっこが密かに始まる

## 些細な神話

眠りに飢えたまま　さまよい暮らす獣たちが　今日も  
夕闇にまぎれながら　例のたまり場に群れ集っている

新入りの有無を確認するのが　彼らが毎晩ここに集う  
目的なのだが　今宵はそれよりもさらに重大事がある

様々な種類の無数の獣たちが　まるで円を描くように  
静かに佇むその中央には　古い金庫がぽつんとひとつ

先ごろ死んだ彼らの仲間の　唯一の遺品らしいのだが  
鍵が行方不明のため　扉はもう二度と開きそうにない

死んだ獣は　ここに集う獣たちが過去に見た夢の話を  
聞き書きし　一冊の本にしようとしていた伝記作家で

金庫の中には　未完成のままの遺稿とともに　死者が  
最後まで大切にしていた何かが安置されているはずだ

今は亡き伝記作家を忍ぼうと　集まった獣たちが声を  
唸らせて金庫の扉を開けようとするが　無駄なことだ

そのくせ獣たちは　伝記作家の生涯をほとんどなにも  
知らない　伝記を書こうとした　そもその目的すら

知らないのだ 「この集団の幸福の地図を描くこと」

「自ら絶滅危惧化した生物の生涯を未来に遺すこと」

伝記作家がどこで生まれたか そこではどんな神話が  
信じられていたか それを知る獣ももはや皆無だろう

「初めは 雲一つなき青空と何もない大地だけだった  
ある日 青空と大地が体を重ね 生命の種をつくった

だが 両者が重なったままだと 種が育つ空間がない  
青空を持ち上げ 大地から引きはがしたのは 死だ」

雲一つなき夕空の下 人間に故郷を破壊され 彼らの  
癒しのために酷使され 虐待され 実験道具にもされ

薬品まみれにされ 仲間を次々に殺処分され 危うく  
食品にされかけ 最後は遺棄された獣たちに囲まれて

金庫は黙ったままだ 悼みの言葉に自信を持ってぬま  
ま亡き仲間の声の前で 懊悩ばかりしている獣のごとく

ここに集う獣たちはみな 伝記作家にどんな夢の話を  
自分がしたのか もはや全く覚えていない たとえば

幾度も戦争に駆り出され 死線の中を必死で生き抜き



ようやく日常を取り戻したのに 些細な理由で死ぬ夢

あともう少しで 死ぬことがすでに決まっているのに  
いつものように歯を磨き 明日の予定を考えている夢

通常宿主に飼われている間は善なる魂だが 宿主が  
変わると途端にその宿主を殺しかねない 折り鶴の夢

貧乏のどん底なのに 独裁者気取りで世の中を語る夢  
おもちゃのピストルで何度も自殺し すぐ生き返る夢

他者の物語を次々に 自らの物語へと加工するうちに  
重度のアルコール中毒になってしまった 哲学者の夢

互いの毒で相手を殺しそうなので 性交を一切しない  
二人の人間の周囲で 自然界の万物が性交に溺れる夢

旅することを許可されず 旅を妄想ばかりするうちに  
妄想の中の旅人に旅の自粛を命じだすストーカーの夢

重要文書をわざと誤訳したことで大量死を引き起こし  
意図せぬ誤訳で再び多くの命を危険に晒す翻訳者の夢

人間たちが雨のように天から降ってくるのを見ながら  
どの「雨粒」を厳選して救うべきか悩んでいる海の夢

伝記作家なくして どの夢も存在すらできなかったが  
集めた夢の膨大さに 作家が発狂しかけていたことを

獣たちは知らない 伝記完成のためには獣らの全滅が  
絶対必要と信じ その日が来るのを心待ちにしていた

伝記作家の密かな本音のことも知らない 執筆前から  
あらかじめ用意されていた起承転結のことも知らない

金庫の中で腐れば腐るほど 遺稿はさらに異様な力を  
帯びていくに違いない その力にあやかりたい一心で

言葉の供養に励む僧侶たちのごとく 金庫の扉の前に  
額づく獣たちの姿は 愛らしいほどに グロテスクだ

生前の伝記作家と親交が特に深かった獣たちの記憶も  
今となっては断片的だ たとえば 「本を書くことは

本との性交であり 同時に本を殺すこと」と述べる姿  
「人間の造るものは命を救うが同時に殺す」と語る姿

「他人の前で 自分を説明させられるたび 『私』は  
細断され 『私たち』は問い直されていく」と話す姿

「自分の精神がどれだけ崩れていこうとも 最後まで  
心の中に残り続けてくれる住処があるはず」と願う姿

金庫を囲む獣たち全ての沈黙を乱し 一頭の新入りが  
遅れてたまり場に到着する 遺稿の話聞かされると

新入りの顔つきがたちまち歪む 笑いをこらえられぬ  
様子だ 生前の伝記作家に 会ったことがあるらしい

「あれは偽善者でした」 新入りはなお笑う 「体が  
自由に動かず 死にたいと嘆いている仲間に出会うと

誰かが支えてさえあげれば あの体にも まだ無限の  
可能性があると言いつつ 自分は何もしないのです」

「自分の正義の行いが 他の獣らを傷つけたとしても  
巻き込まれた自らをかばうのみで 謝罪なしでした」

「天災は生物全てに平等に訪れると話していましたが  
それが強者の言い草だと 自覚できていたかどうか」

「あれは人間に飼われていたスパイです」 新入りが  
断言する 「そのために文章力を磨いていたのです」

「皆さんは全員 死んだあの作家の手による産物です  
自らの創造物にいま弔われているとは 何と皮肉な」

「伝記作家になる前 あの獣が書いていたのは詩です

どれも観念的すぎて 心に全く刺さらぬ詩でした！」

まるで新入りの言葉が行方不明の鍵だったかのごとく  
静かに金庫の扉が開く 獣たち全員に既視感が訪れる

金庫の中に延々と広がるのはどこまでも どこまでも  
青い空と どこまでも どこまでも 何もない大地で

重なり合おうとする両者の間に それをさえぎろうと  
立ちただかっているのは 使い古された一本のペンだ

圧力と浮力の両方に耐えているこの棒に注目せぬまま  
「開いた！」と叫ぶ獣たち 狂騒は朝まで続きそうだ